有松まちづくりの会役員会（3月22日）

日本遺産が来年度一区切りすることもあり、今後の活動を見据え、有松まちづくりの会「会則」改定案ついての話し合いが行われました。なお、総会は下記の通り行われることが決まりました。

5月19日(水）13:30～ 有松まちづくりの会総会 絞会館

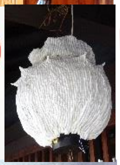
文化財防火デー消防訓練（3月6日）

消火ハリアー

絞会館駐車場を会場に、参加人数を絞って行われました。今回は、竹藪が燃え広がったことを想定しての消火訓練でした。住民による初期消火の必要性から、「街かど消火ハリアー」を使って実施されました。消火ハリアーとは、写真(下右)の背負っている物です。約7kg。中に20m放水ホースやノズルが収納されています。水道の蛇口にホースを接続して放水します。

小澤学区委員長は「放水のやり方を身につけ、自分の町内会で是非とも購入していただくよう働きかけて欲しい。有松出張所は改修のため、有松に消防車が戻ってくるのは約２年後です。日本遺産の地域を決して燃やしてはいけない」と、購入の必要性を訴えていました。

知ってますか？ ありまつ暖簾と提灯



〇暖簾〇 ありまつ暖簾が作られるようになったのは、今から15年程前、2005年の愛知万博がきっかけです。大勢の観光客に来ていただくために、有松の町全体を飾る物として、有松絞商工協同組合で企画されました。協力していただけるお店などの入口に掛けられ、文字通り有松の顔になっています。

昨年日本遺産認定の記念事業として新たに制作されることになり、右下に日本遺産のロゴマークも付けられました。

〇提灯〇 2016年に有松の町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定されたことを祝う行事の一環として、各戸の軒先に吊されるようになりました。また、大晦日の深夜に提灯を掲げての祝賀行列も、重伝建選定祝賀事業実行委員会により行われました。絞会館から祇園寺まで150名程の方が参加されたそうです。

この提灯、白・桃・浅葱・藍の４色のカバーがあります。四季を表わしているとのことでした。

ナナちゃん　絞りワンピースで登場（2月23日～3月2日）

名古屋駅名鉄百貨店の看板娘ナナちゃん(身長６．１ｍ)が、超ビッグな有松・鳴海絞ワンピースで装っていました。

制作したのは、桜台高校ファッション文化科の生徒さん。有松絞りの魅力を未来に受け継がれるようにと、願いを込めて作られたそうです。制作に使用した反物は、岡家住宅の所有者岡益光氏が「有松絞りの良さを伝えたい」と寄贈された物です。

問屋時代に仕入れた反物が一万本近く蔵に眠っているとのこと。その内の250反を高校に贈り、残る反物の活用方法を更に検討されているとのことです。現在、岡家住宅に展示してあります。

有松絞りグッズ公募展開かれる（3月13日～21日）

会場には、有松絞りの技術技法を活かしたおしゃれで現代的な作品が展示してありました。入口で投票用紙が渡され、5点まで選びます。ＮＰＯ法人ＣＡＮが、新しい有松絞りの商品を生み出そうと企画され、それに応募された作品です。県外海外からを含めて21名の応募がありました。一般来場者の投票と有松絞り関係者による審査で、商品化される作品が決まるとのことです。

おこしもんづくりに挑戦（3月15日）

今年も、カフェ庄九郎でおこしもん作りが行われました。昔は雛祭りが近づくと家々でつくられ、雛人形にお供えしたそうです。名古屋やその周辺の郷土料理です。お伺いしたとき、２組の親子が挑戦中。熱湯でこねた米粉を木型に押しつけたり、綿棒で着色したりしていました。作り終えると走って次の木型を取りに行く子どもの姿に楽しさが伝わってきました。

《豆知識》 カフェ庄九郎の床の間裏から弘化３年(1846)の墨書が発見され、この建物が明治初めに有松を撤退した竹田庄九郎家の一部であることが分かりました。ここは有松の歴史を体感できる貴重な建物です。

桶狭間小学校3年生　有松で地域学習（3月16日）

119名の児童が前半後半に分れて有松に勉強に来ました。事前学習にしっかり取り組まれたようで、山車会館では説明する前に「布袋車だ」との声が聞こえてきました。案内を務めたあないびとの会の皆さんも学習意欲に圧倒されていました。

有松東海道青空市　終了

平成23年(2011)11月20日から始まった青空市が、この3月で終了しました。有松商工会・有松に賑わいをつくる会の主催で、13店舗の参加を得て開催されました。数ヶ月後旧ふうたん跡地から有松商工会周りに会場が移され、今日に至ります。出店数・来店者数共に徐々に減少し、現在は豊明農園とフルールひまり(花屋)のみとなりました。お客様も10名前後であることから、2店舗の話し合いで出店をやめ、青空市が終了することになりました。

出店された皆様、長年にわたり有松の賑わいづくりにご協力いただき、感謝申し上げます。

ありまつさんぽ道（2月20日～3月21日）

◇まちの様子

2度目の緊急事態宣言解除もあって、3月に入ると少しずつ人出が戻ってきています。特に、イベントがあるときには東海道も賑わいを見せ、華やいだ雰囲気が出ています。

この時期に特徴的なのは、福よせ雛の写真を撮る人達が多くみえること。お気に入りの雛にレンズを向けています。地元の方も福よせ雛の手入れに余念がありません。皆で有松に賑わいを引き寄せたいものです。

◇福よせ雛さんぽ道散策会（3月7日）

ありまつさんぽ道に協賛して、緑区役所主催の散策会が行われました。福よせ雛が飾られていることもあって、小さいお子さんも参加されていました。コロナ禍の中少人数の案内ということもあり、ゆっくりと見学できたようです。

アリマツーケット（3月7日）

小さなお子さん連れの方がたくさん会場を訪れていました。参道入口では遊び場所が多く用意され、階段を上ると15店の販売ブースが設けられていました。天満社にもたくさんの参拝者が訪れていました。年ごとに来場者が増えてきているようです。

町家ライブ　甦る古楽器「9鍵の古典フルート」（3月6日）

前号(かわら版128号)で紹介した棚橋龍三先生の遺品フルートを使った演奏会が棚橋家住宅でありました。

参加者約35名。演奏会に先立ち娘の恭子さんより、フルート発見から今日までのお話がありました。「10年程前住宅改修の折りに見つかった父の遺品。捨てようとの思いを止めたのが三井さん。オーボエ奏者で、昨年1月に竹田家で演奏したことをきっかけに、恭子さんは堤さんに相談しました。専門家の指摘もありこの遺品は古いドイツ製のフルートであると・・」

堤さん、二人を結びつけた竹田さん。三井さん。そして演奏してくださった古楽器研究家の森本英希さんに繋がる出会いを、このフルートはもたらしました。

棚橋家住宅で見つかったフルート

天満社春季大祭（3月21日）

今年も新型コロナ感染防止のため、包丁式や餅つきは中止となりました。雨にも降られたお祭りとなりました。それでも、ぬかるみを気にしながら参拝する人が続いていました。拝殿でご祈祷を受けたり、上の広場ではおみくじを買ったり献書を見学したりする人の姿が見られました。

岡家住宅では、有松あないびとの会の皆さんが参拝帰りの方々に声がけして、建物案内や町並みツアーをしていました。有松の歴史を感じ取っていただいたようです。

◇丸坊主の天満社◇

（会報「有松」No60より）

今から70年程前の天満社です。戦時中のＢ２９爆撃と戦後の燃料不足による木々の伐採で、文字通り丸坊主になっていました。その後、青年団グループにより数千本が植樹され、仰ぎ見るような木々に囲まれた今日の森ができました。

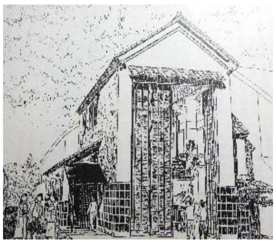
有松で過ごした50年　有松あないびとの会　浅野　康子

３ 胎動するまち

有松に住んで１５年くらい経ち世の中が観光や歴史に関心を向け始めた頃、ぽつぽつと絞りの小売りの店ができはじめました。絞会館や山車会館が建設され、有松の観光に少しずつ目が向けられるようになってきました。世の中の変化の波が有松にもやってきました。各地で大型スーパーが台頭し個人商店が少なくなって社会問題にもなりました。有松に２軒あった銭湯がなくなって残念でした。

絞会館が完成して間もなく現在の上皇様ご夫婦をお迎えした有松は注目を集めました。国道１号線から郵便局を曲がり館に到着されました。沿道は日の丸の小旗を振る人々でいっぱいになりました。私も車列に向かって日の丸を振ったのを覚えています。その頃は絞りまつりも山車まつりも隔年の行事でした。（続く）

東湯


山車会館

絞会館での記念撮影

催事・行事の予定

4月19日(月)　18:00　有松町並み相談会　コミセン
4月25日(日)　07:30　かえで道清掃　有松まちづくりの会
4月26日(月)　18:00　有松まちづくりの会役員会　コミセン
4月下旬　絞りの鯉のぼり展示　有松東海道沿い　同実行委員会

発 行 者:竹田嘉兵衛(有松まちづくりの会　会長)
編 集 者:加藤　一成(有松まちづくりの会　広報部員)
T･F 052-623-1676　090-4163-2671　E-mail katoisse@mc.ccnw.ne.jp

有松まちづくりの会は、ホームページを公開してます。 有松のまち 検索

特集　本物の藍染に挑戦　～竹田嘉兵衛商店で藍甕びらき～（3月3日）

今年の大河ドラマ「晴天を衝け」で、渋沢家の藍づくりが描かれるシーンがありました。余り知られていない蒅(すくも)づくりの様子を初めてご覧になった方も多かったのではないでしょうか。吉沢亮さん演じる栄一の手が青いのを見て、「昔は手が真っ青な人がたくさん有松にはいた」と古老が語っていたのを思い出しました。

乾燥させた藍の葉を水を打ちながら混ぜ合わせ約100日間発酵させて蒅は完成。それに木灰を加え水でとくと美しい青の染料になります。

化学染料でない本物の藍づくりに挑戦するため、竹田嘉兵衛商店で藍甕びらきが行われました。この藍甕工房は、故竹田耕三氏が使われていた建物で、床には藍甕が 5つ埋設されています。この藍甕を使って、本藍染めを再開されるとのことです。

藍甕工房

神事の後、本藍染めの作業を見学させていただきました。耕三氏のご子息の竹田昌弘氏を責任者に、地域に開かれた取り組みが進められるそうです。「藍は生き物、一日も店を空けることはできない」と、昌弘氏はその覚悟を話してくださいました。

染色作業

※

＜　本藍染のやり方　＞

①藍建て　藍の成分を水に溶け出させるため、甕の中に蒅と木灰・ふすま(小麦のぬか)※を入れます。微生物の力で発酵させます。これを「藍建て」と言います。徐々に発酵が進み液面に膜が出始め、数日かけて濃度をあげて染色できる状態にします。藍の色の出具合をＰＨなどでチェックします。

②染色　液に布をつけ、まんべんなく液を行き渡らせます。次に布を引き上げます。空気に触れ、緑色から青色に変わります。作業を繰り返すと青の色が濃くなっていきます。最後に水洗い。

手蜘蛛絞り披露

＜　本藍染に挑戦する訳　竹田嘉兵衛氏あいさつより　＞

明治中期に化学染料ができて、急速に手間のかかる天然の藍染めは廃れてしまいました。（注）有松での化学染料使用は明治34年(1901)

1995年にドイツ・フランクフルトにある国立の工芸美術館で藍染展（日本の絞り展）が行われました。そこに展示されたのは写真のような木綿の着物。現地での反響が心配でしたが、大評判となり、東洋作品で入館者数の新記録をとることができました。

どうしてそんなことになったのか、館長さんにお伺いすると、「モネのアトリエに行ってみなさい」と。そこでアトリエを訪問すると、睡蓮を描いた作品と共に、300枚以上の浮世絵が並べられていました。

モネは浮世絵を通して日本を見ていました。浮世絵には多くの藍が使われ、天然の藍の中で人々は生活していました。日本独特の蓼科の藍が衝撃を与えたようです。当時はジャポニズム、後にアールヌーボーという芸術が生まれましたが、日本の着物も大きな影響を与えたようです。日本の藍の色がヨーロッパの人々に深い影響を与えているため、多くの来館者を得たようです。

このことをきっかけに、もう一度本物の藍に挑戦することにしました。　（文責　伊藤総俊）

日本遺産企画 まちなみ美術館・温故知新(10/24～11/15) 報告 1

昨年、東海道沿いの町家のほか絞会館や山車会館を会場に開かれた展示会には、コロナ禍の中、たくさんの人が足を運んでくださいました。「いつも見られるといいね」との声もありましたので、紙上で簡単に展示内容を紹介させていただきます。

1 故竹田耕三コレクションから

展示会場：竹田家住宅・中濵家住宅

耕三氏の江戸時代から昭和時代に及ぶ膨大なコレクションから１７点の藍染めの絞り浴衣が展示されていました。耕三氏は竹田嘉兵衛会長の弟で、生涯有松絞りの研究と藍染めの復活に努力された優れた藍染めの絞り作家です。2013年逝去。享年６７歳。

一般に木綿製品は着物として使用した後は、おしめや雑巾にして最後まで使われましたので、なかなか木綿は残りません。耕三氏が収集してくださったので、今日まで残すことができました。

そんな中から２点紹介します。上は明治時代のもの。竹田嘉兵衛商店でお揃いで着られていました。屋号「笹加」のマークが入っているのが分かります。また、下のものは江戸期制作です。襟中心から放射状に絞りが入っています。当時の人は飛び飛びの模様が火縄銃の玉が飛び散っているように見えたようです。

このように非常に大胆なデザインのものが多く、今日でも通用しそうなものばかりとの印象を受けました。

竹田家住宅での展示風景

2 故片野元彦絞り作品

展示会場：服部家住宅

片野元彦氏は名古屋市生まれ、岸田劉生に師事する画家。染色工芸も手掛け、戦後は民芸運動に関わります。もっと美しい絞りを創りたいと努力され、頻繁に有松に足を運び勉強されていました。昭和50年８月に７６歳で死去。

展示されていたのは２点だけでしたが、伝統的な藍染めの中に驚くほど新鮮な感覚を感じさせる作品でした。

服部家住宅での展示風景

3 タペストリー展

展示会場：有松・鳴海絞会館

有松を拠点に全国で活動している「シボリコミュニティ」による藍染絞りのタペストリーの展示です。1985年に名古屋で結成され国内６か所で活動、主宰は早川嘉英氏です。昨年高野山真言宗金剛峯寺での展覧会で展示された作品の内１９点が展示されていたとのこと。現代の絞りの可能性を追求すべく、魅力ある作品が紹介されていました。 （文責 伊藤総俊）

絞会館での展示風景